いぶし銀の活躍

水泳部部長
松本 道介

私はたまたまスポーツが好きなところからここ四年近く水泳部長をつとめています。部長をお引き受けしたときはオリンピックでメダルをとる選手の出る部になるとは、まったく思っていませんでした。

部長としての仕事は、選手たちのさまざまな大会での活躍ぶりをまめに見守っていくことだと考えておりますので、今回は単身でシドニーへ出かけようと思いたちました。そこへスポーツの大変お好きな鈴木学長（相撲部部長でもあります）が、自分も行こうと声をかけて下さいました。さらに南甲倶楽部会長の高橋秀義さんをはじめ十人ほどの学員が参加を申し出られ、〝中央大学応援団〟が出来上がってしまいました。

〝応援団〟ですから中大の小旗くらいは持っていくつもりでしたが、東京の辰巳の国際水泳場の倍以上に大きいオリンピックプールでは、そんな旗を振ってもなんの役にも立たなかったでしょう。その点、南甲倶楽部の方々が大きな日章旗を五本、大きな中大「C」の応援旗を五本お持ち下さったのがありがたく、団員一人一人が大きな旗を振りましたので、まるで大応援団が来ているように見えて大成功でした。われわれの応援の甲斐あってと言いましょうか、ご存じの通り選手たちは素晴らしい活躍をしてくれました。

むろん、誰しも一番期待したのは中村さん、田中さんの金メダルでしたが、オリンピックが終わってしばらく時を経た今考えますと、六人のオリンピック選手の活躍はいかにも中大らしい活躍だったという気がします。と言うのも、私は中大の校風がどこか地味な、いぶし銀の輝きに通じるものがあると考えるからです。

中村さんの銀メダルは、まさにいぶし銀の銀でしたし、中村さん、田中さん、源さんを中心に筑波大学出身の大西さんを加え、四人が力を合わせて勝ちとった銅メダルも、世界の水泳界を考えた場合、大変価値の高い底光りする銅だったと思います。きのう、三人の選手からメダルを見せてもらい、手にとって重みを確かめたときに、つくづくそのことを実感しました。

平泳ぎの磯田さんも腰痛をかかえるなかで二百の準決勝まで残りましたし、男子の谷口君が四百メドレーで自己新を出して決勝に残ったこと、禹澈（ウ・チョル）君が韓国代表として二百、四百自由形の予選に出場し、四百で自己新を出したことを含めて、六人の選手はそれぞれに本当によくやってくれたと思います。

（文学部教授）

水泳会場付近を行く鈴木学長（左）と松本水泳部長（その右）